けいおん！ 桜高軽音部と男の娘!?

蒼臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん！　桜高軽音部と男の娘！？

【Ｎコード】
Ｎ４９１３Ｙ

【作者名】
蒼臥

【あらすじ】
けいおん！の二次作品です。
初の作品なので、やたら読みづらいかも知れませんが、大きな心で読んで下さると嬉しいです。

♪プロローグ♪（前書き）

プロローグです。

見づらいとは思いますが、どうぞ見てやって下さい。

♪プロローグ♪

「はぁ…」

と、溜め息を吐く男がひとり。

名を柳　凍牙。
今年の春から
高校一年生である。

彼が溜め息を吐く理由は親にある。
「あたしら引っ越すから。」
という、突然の発言により、
桜ヶ丘に引っ越す事になったのだ。かといって、彼が文句をいった所でもう遅い。
母の話によると、出発は五日後だというのだ。

そして五日経った今、
彼は勝手に編入の手続きをされた、
【私立桜ヶ丘高校】
へ、向かっている。

編入と言っても、まだ春休みだから普通に受験してきた人とさほど変わりはないのだが。
一応編入の手続きやらで、校長に挨拶に行かなければならない。「失礼しま～す。」

「君が編入してきた…柳　凍牙……君？」

「そうですけど。」
「女の子ではないのか？」
「女の子ではないです。」
「オホン。ま、まぁいい。」
「……よし。これで手続き完了だ。」
「頑張って勉学に励んでくれたまえ。」
「はい。失礼しました。」

――所変わって帰り道――

「にしても桜ヶ丘高校って去年まで女子高だぞ。男友達できっかな？」

「不安で仕方無い。」
と言いながらもこれからの生活に期待している凍牙であった。

♪プロローグ♪（後書き）

読みづらいと思いますが、誹謗中傷はお控え願いたいです。

♪プロローグ2♪（前書き）

小説って……難しいですね。

♪プロローグ2♪

――入学式の朝――
ふと、時計を見ると時刻は八時。
「やっべえ！遅刻！」
「入学式に遅刻はやばい！」
と言って家を飛び出て数十分。

俺は校舎の前で立ち尽くしていた。
何故なら校舎に備わっている時計の針が指し示しているのは七時半。

俺の記憶によると八時に家を出たはずだ。
なら何故俺は七時半に学校に着いているんだ。
時間が戻った？
そんなことは有り得ない。
じゃあ何故だ……
時間を見間違えたとしか考えられない。
そうして俺が冷静に解析している間に、後ろから声が聞こえてきた。

「ちこくちこくぅ～！！」

その声の発信源は門の近くで立ち尽くしている俺に強烈なタックルを喰らわせてきた。

「いってぇ！」

「いたた～。あっ！すいません！学校に遅れそうで急いでたんです。

」
「こんな朝早くにか？」
「え…あ！時計見間違えてた！」
「俺と一緒のことしてら。」
と呟くと、
「ホントにぃ！？」
しっかり聞こえてたようだ。
「名前なんて言うの？」
「柳　凍牙だ。」
「そっかぁ♪よろしくね。とうちゃん♪」
「男なんだが…」
「そうなんだ！かわいい♪」
「なっ！かわいいっていうな。」
「じゃあとうくんだね！」
「無視かよ…」
「あっ！私平沢　唯。よろしくね♪」
「あぁ。」

こうしてこの町にきて初めての友達?ができた。

♪プロローグ2♪（後書き）

次も頑張ります！

♪プロローグ3♪（前書き）

プロローグが長くなってしまいました。

♪プロローグ3♪

平沢と話していると、

「あら？唯じゃない？」

「あっ！和ちゃん！」

「唯、その人は？」

「とうく…「柳　凍牙だ。」

「そう、真鍋　和よ。よろしく。」

「あぁ。宜しく頼む。」

「そういえば、クラスはもうみた？」

「ううん。まだだよ？」

「じゃあ一緒にいきましょ。凍牙も。」

そうして一緒にクラスを見に行くことになった。

「あら？みんな一緒じゃない。」

「ホントだ！やったぁ♪」

「騒がしくなりそうだな。」

「ひどーい！」

「フフッ…」

「あー！とうくんが笑ったー。」

「うるさい！忘れろ！」

本当に騒がしくなりそうだ。

♪プロローグ3♪（後書き）

感想など、くれると有り難いです。

それだけで励みになります。

♪第一話♪（前書き）

ちょっと長くしてみました。

♪第一話♪

あれから数週間。

「もうすぐ五月か…はやいな～」

「あぁ、そうだな。」

「お前は部活はいるのか？」

「いや、まだ決めてないが？」

「いや、真鍋がニートニートいってきてさぁ～。」

「ふーん。」

「興味なしかよ…」

「あぁ。」

「否定しねぇのかよ！」

このニートは土屋　翼。

俺の新しい友人（変態）である。

「おい、なんか失礼な紹介しなかったか？」

「いや？別に。」

「ならいいけど。何かしら部活に入らないと真鍋がニートニートうるさいぞ。」

「あぁ、いい部活ないか探してみる。」

そんな話をしながら教室にはいると、

「とりあえず、軽音楽部って所に入ってみました。」

と言う声が聞こえてきた。

俺に気づいた平沢は、

「あっ！ねえねえとうくん、軽音部って何？」

「は？」

「あのね、軽音部って所にはいったはいいけど、何をするのか分かんないの。」

「わかんねえ部活に入るなよ…」

「えへへ。お恥ずかしい限りで。」

「軽音部はな、ギターとか弾いて、バンドくむやつだよ。」

「ギター？」

「えー！私、軽い音楽って書くから簡単な事しかやらないと思ってた。」

「例えば？」

「口笛とか…」

「やる気なさすぎだろ…その部活。」

「私もそう思うわ。」

「てかお前なんなら弾けるんだよ…」

「……カスタネット。」

「あぁ、似合ってるな。」

「ひどーい！」

ーーー放課後ーーー

「ねえねえとうくん。」

「何だ？」

「一緒に音楽室について来てください！」

「何で？」

「実は…軽音部辞めますって言いに行きたいんだけど……」

「一人じゃ行きづらいって訳か…」

「うん……」

「まぁ、他にやることもないしついて行ってやるか…。」

「ホントにぃ♪」

さっきとは打って変わって上機嫌な平沢。
切り替えがはやいな。

ーーー音楽室前ーーー

「早くはいれよ。」

「うぅー、だってぇー。」

と、音楽室前で話していると、

ポン

と、肩を叩かれた。

「「ひゃあっ！」」

余りにも突然だったので、
二人して情けない声がでてしまった。

「うちの部の前でなにやってんの？」

と言う声が聞こえた。

後ろをみると、
カチューシャを着けた
女生徒が笑みを浮かべて立っていた。
「もしかしてあなたが平沢唯さん？」
「こっちが平沢　唯です。」

「あっ！テンポ悪くて使えないドジっ娘！」

うわぁ、ひでぇ言われよう。
と思ってると、
急にカチューシャの女生徒が平沢の手を取り、
「いや～誤解しててゴメンね～。」

「ギター、すっごくうまいんだよね。きてくれるの待ってたよ。」
何か早くも歓迎ムードだ。
「所で君は…？」
「あぁ、俺は…」
「入部希望者！？」
「え！？いや、俺は…」
「みんな～入部希望者が二人もきたぞ～」
「！？ホントか。」
「まあ！」

「ようこそ軽音部へ！」
と黒髪のロング。
「歓迎しますわ～。」
とほんわか眉毛。
「ムギ！お茶の用意だ！」
とさっきのカチューシャの女子
「はい～！」

とムギと言われたほんわか眉毛。
「さあ座って。」
と黒髪のロング
「あ、あぁ。」
と座る。
少ししたら、
かなり高級そうな紅茶とケーキが出てきた。
「どうぞ召し上がって。」
これは食っていいものか…
俺たち入部希望じゃないし…
ふと平沢をみると、
「おいしぃー！」
コイツめっさ食っとる！
まあいいや。と思って食ってみる。
「美味しい～！」
と、女の子みたいな声を出してしまった。
まぁそれはさておき、

「えっと……」

こっちを見て困っている黒髪。

「柳だ。」

「そっか、平沢さんと柳さんはどんな音楽をやりたいの？」

「その事だが…」

「俺は入部希望じゃないぞ。」

「「「……えぇぇぇ！！！！」」」

ーーー数分後ーーー

「じゃあ平沢さんが入部希望者で柳さんが付き添いなの？」

「ひゃいっ！」

「じゃあ平沢さんはどんな音楽がしたいの？」

「あと、どんなギタリストがすき？」

「あの……じっ、実は入部するの辞めさせて下さいって言いにきたんです。」

「あと、どんなギタリストがすき？」

「あの……じっ、実は入部するの辞めさせて下さいって言いにきたんです。」「もっと違う楽器ひくのかなって思ってて…」

「じゃあ何ならできるの？」

「カスタ…ハーモニカ！！」

「あっ！ハーモニカならあるよ！

ふいて「ごめんなさい！出来ません。」

「本当にごめんなさい。じゃあ行こう？」

「もう一杯お茶いかが？

クッキーとマドレーヌもあるの！」

「じゃあ少しだけ…」

「柳もほらほら！」

とカチューシャ。

「とうくんも食べよ？」

ーーー数分後ーーー

「じゃあこれで…」

「あぁっ！まって！」

「お菓子食べてるだけでも良いから！」

「ごめんなさい…軽い気持ちで入部するなんて書いて…期待させるだけさせといてなんてあやまったらいいかぁ～！」

平沢がマジ泣きだ！

焦り出す軽音部一同

「こっちこそ無理に引き止めてゴメン…」

「ごめんなさい。」

「ゴメンな…」

次々に謝る軽音部一同

「ふぇーん！」

だが平沢は泣き止まない。

「そうだ！演奏！」

「演奏をすれば…」

演奏の準備に取りかかる

軽音部一同。

「おい平沢、演奏してくれるって。」

「演奏してくれるのぉ♪」

「1、2、3、4」

のカウントで演奏が始まった。
曲は翼をくださいだ。
平沢はとても聞き入ってる。
とっくに泣き止んでいる平沢。
作戦は大成功といってもいいだろう。

そして演奏終了。

「えへへ、どうだった？」
カチューシャがきくと、
平沢が、
「えっと、言葉にしづらいんだけど…あんまりうまくないですね！」
「でも、すごく楽しそうでした。わたしこの部に入部します！」

「「「…やったぁ～！」」」

「とうくんも一緒に入るよね！」

「はぁ！？」

「そうだよ！柳もはいれよ。」

「まぁ真鍋にニート扱いされるより良いか…」

「ってことは…！」

「「「「やったぁー！」」」」

「よし！みんなで記念写真とろう！」

どこからかカメラを取り出すカチューシャ。

「あっ、私のカメラ。」

黒髪のカメラなのだろう。

だがカチューシャはそんなことお構いなしに、

「ハイチーズ！」

《カシャ》

こうして新生軽音部の姿が写真におさめられた。

♪第一話♪（後書き）

アドバイス・感想まってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4913y/

けいおん！ 桜高軽音部と男の娘!?

2011年11月17日20時11分発行